平成 17 年 1 月の解説（週間天気予報）

【1 月の天候状況】

1 月の平均気温は全国的に平年並でした。中旬までは、気圧の谷の通過後に強い寒気の流入があり、全国的に気温が平年を下回る日が多くなりました。15 日から 16 日にかけては、本州の南岸を低気圧が発達しながら通過して、関東甲信地方から東北地方の太平洋側を中心に大雨や大雪となりました。その後は、短い周期で低気圧が日本付近を通るようになり、冬型の気圧配置も長続きしなかったため、全国的に気温が平年を上回る日が多くなりました。月末には、再び強い寒気が流入して、全国的に気温が平年を大きく下回りました。

月降水量は、北日本と東日本では平年より多く、関東甲信地方は平年の 174%となりましたが、西日本と南西諸島では平年より少ない地方が多く、四国地方は平年の 40%でした。

【1 月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は、全国平均で例年(注)より 2 ポイント高い 74%でした。西日本で例年より 2 ポイント低くなった地方もありますが、北日本や東日本では例年より高かった地方が多く、関東甲信地方は例年より 7 ポイント高くなりました。

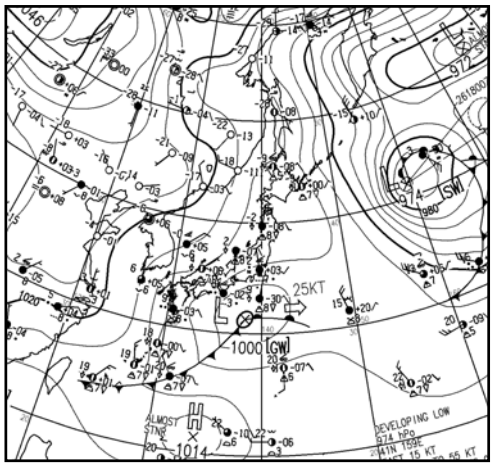
最高気温の予報誤差は、全国平均（2～7 日目の平均）で例年より 0.1℃小さい 2.1℃でした。全国的にも例年並か例年よりやや小さく、東海地方は例年より 0.3℃小さくなりました。

最低気温の予報誤差は、全国平均で例年並の 2.1℃でした。北海道では例年より 0.3℃大きくなりましたが、その他の地方は例年並か例年よりやや小さく、九州南部地方は例年より 0.5℃小さくなりました。

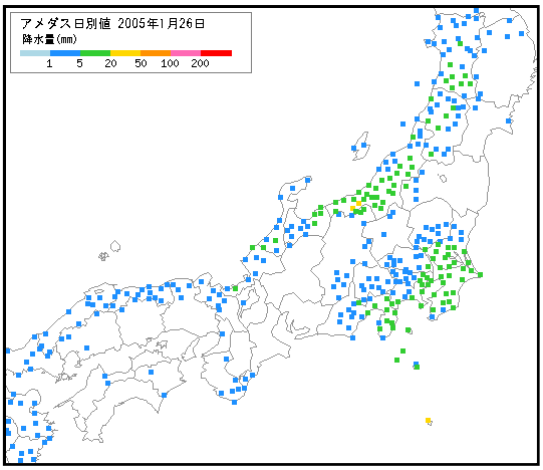
(注) 例年値は気象庁ＨＰ（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【1 月の週間天気予報から】――南岸低気圧と東京地方の降水（26 日の予報から）――

冬季でも、西高東低の冬型の気圧配置が緩み、低気圧が本州の南海上を東進することがあります。一般に、低気圧に伴う雨や雪は、低気圧の中心から北側へ 400～500km まで広がりますので、低気圧が、「北緯 30 度線付近を通るときは、低気圧に伴う降水域は東京地方までは達しない」のですが、「北緯 30 度線よりも北側に寄ったコースを通る場合には、東京地方で雨または雪が降る」、と予想できます。



26 日 03 時の地上天気図



アメダスによる日降水量分布（26 日）

日本海側にある降水域は、26 日午後を中心とした冬型の季節風に伴う雪である。

26 日の東京地方の週間天気予報については、「低気圧が本州の南海上の北緯 30 度線付近をあまり中心気圧を深めることなく東進し、東経 140 度線を超えた東海上で発達するため、低気圧に伴う降水域は関東の南海上のみ」と判断し、3 日前の予報まですべて「降水なし」で発表しました。

しかし、25 日に東経 130 度線を横切る頃に低気圧の中心が北緯 32 度まで北上して、その後は北緯 32 度を維持したまま東進しました。さらに、関東の南海上まできた頃には既に低気圧は発達し始めており、低気圧の北側にあった雨雲が静岡県から関東地方まで広がったため、東京地方では 26 日の 0 時を過ぎた頃から昼前にかけて各地で合計 1～6㍉の雨や雪が降りました。

【3 月の天候の特徴と週間天気予報の利用に際して】

3 月は、西高東低の冬型の気圧配置は長続きしなくなり、移動性の高気圧や低気圧が次々に通過するため、天気が周期的に変わります。低気圧が通過した後には、大陸の黄土地帯やゴビ砂漠などから舞い上がった細かい砂（黄砂）が、上空の偏西風に乗って日本列島に飛来することがあります。大量に飛来すると洗濯物を汚すなどで社会生活に影響するだけでなく、交通障害を引き起こす場合もあります。

最近の例では、平成 14 年に黄砂が大量に飛来して、九州地方を中心に航空機の欠航や遅延の原因にもなっています。

この頃の週間天気予報で、雨の翌日に全国的な晴れが予想されているような日には、黄砂のやってくる可能性があります。

なお、黄砂の情報については、気象庁ホームページにある次の URL もご利用ください。

http://www.data.kishou.go.jp/obs-env/kosahp/info_kosa.html